

高橋康徳  
(神戸大学)

tufs.y.takahashi@gmail.com

## 1. 上海語の基本声調と変調

上海語は、中国語吳方言グループに属し主に中国上海市で用いられる。上海語は(1)に示すような5種類の基本声調（単独音節時の声調）を持つ。なお、(1)の調値とはピッチの高さを1（最低）から5（最高）の5段階で表す表記体系であり、下線は「その音節が短くつまる」ことを表す。

### (1) 上海語の基本声調 (許宝華ほか 1988: 8)

声調名	T1	T2	T3	T4	T5
調値	[53]	[34]	[23]	[55]	[12]

上海語では複数の音節からなる形式（語または句）に変調（tone sandhi）が適用される。変調が適用された形式では、第1音節の基本声調が形式全体のピッチを決定する。(2)では2音節語に上海語変調が適用された例を示す。

### (2) 上海語変調の例 (Yip 2002: 187)

- a. 三杯 [sɛ (T1). pɛ (T1)]、三盤 [sɛ (T1). bø (T3)] → [55. 21]  
 b. 四杯 [sɪ (T2). pɛ (T1)]、四盤 [sɪ (T2). bø (T3)] → [33. 44]

(2a)では第1音節「三」のT1が2音節語全体の調値[55.21]を決定し、第2音節の声調はピッチの決定に関与しない。同様に第1音節の声調がT2である(2b)では、第2音節の声調に関係なく[33.44]という調値を取る。

## 2. 上海語の変調域

前節で見たような上海語変調は、どのような単位に適用されるのだろうか（本研究では変調が適用される単位を暫定的に「変調域（sandhi domain）」と呼ぶ）。許宝華ほか（1988: 24）は、「変調の適用範囲は広く、語であろうと句であろうとどのような統語構造に属していても一般的に制限がない」と述べる。韻律理論を用いた Yip (1980: 164) は上海語の変調域は強弱格のフット（trochaic foot）であると主張した。それに対して Selkirk and Shen (1990) は、変調はフットではなく音韻語（phonological word）の内部で起きると主張した。Selkirk and Shen (1990) が提案した上海語の音韻語形成規則を(3)に示す。

(3) 上海語の音韻語形成規則                      Prosodic Word: {Left, Lex<sup>0</sup>}

※Lex<sup>0</sup>は語彙的カテゴリー（名詞、動詞、形容詞）に属する語を表す

(3)は「名詞、動詞、形容詞の左端（始端）を音韻語の左端（始端）にせよ」と指示する規則である。つまり、この規則は上記3つの品詞以外から始まる音韻語が存在しないことを予測する。

Selkirk and Shen (1990)の解釈に対して Duanmu (1993, 1995)は、(3)の規則では正しい変調域が予測できない名詞句が存在することを指摘する。例えば、(4)の2つの名詞句は「形容詞+名詞」という構造を持つ点では共通しているが、音節数によって異なった変調域が形成される。

(4) 同じ構造でも異なる変調域が形成される例 (Duanmu 1995: 230)

- |            |                 |
|------------|-----------------|
| a. 大 飯 店   | b. 海 鮮 飯 店      |
| (da ve ti) | (hɛ ei) (vɛ ti) |

この問題点に注目した Duanmu は、上海語の変調域は音韻語ではなく強弱格のフットであると主張し、一連のストレス付与規則を提案した (Duanmu 1993: 26)。上海語の変調域の韻律単位の問題は未だに結論が出ていないが、現時点では Duanmu の解釈が広く受けられている (Yip 2002 など)。

以上のように、上海語の変調域に関しては韻律理論を利用した演繹的な分析が数多く行われているが、実際の発話やデータに基づいて変調域がどのように形成されているのかを量的に分析した研究は管見の限り毛世楨 (1997)しか存在しない。毛世楨 (1997)は64文(746音節)の発話から308個の変調域を同定した(どのような話者からどのような発話を収集したのかは明記されていない)。調査結果は以下のようにまとめられる。【1】データ全体の10.3%を占める77個の音節は変調をおこさず基本声調がそのまま実現した、【2】語の境界と一致する変調域が164個(観察された変調域全体の53.2%)、語彙に準ずる比較的緊密な構造を持つ句と対応する変調域が51個(全体の16.5%)存在した。【3】変調域全体の約30%に当たる97個は「特殊な構造」を有する。例えば、(5)のような例である。

(5) 「特殊な構造」での変調域 (毛世楨 1997: 89)

- |                |                  |
|----------------|------------------|
| a. 年紀 (輕 的 辰光) | b. 拔 只 (電話 拔 我)  |
| 年齡 若い de 時間    | かける CL 電話 to 1sg |
| 「年齢が若いとき」      | 「電話を私にかける」       |

(5a)では「形容詞+的+名詞」、(5b)では「名詞+介詞+代名詞」で1つの変調域を形成している。上述の調査結果から、毛世楨 (1993: 90-91)は静的・連合的な変調域は語彙レベルに属する音韻語だが、語や文の組み合わせの中では(つまり連辞的には)統語論・語用論的な機能を持つと考え、上

海語の変調域と対応する言語学的単位は、「線条的文法構成素 (linear grammar constituent)」であると主張する。

毛世楨の問題点としては、分析に用いたデータだけではなく調査結果の詳細な情報も提示されていないため変調域の全体像が見えてこない点、および「線条的文法構成素」に関する詳細な定義づけや説明がないため主張の妥当性が判断できない点の2点が少なくとも挙げられる。このような問題点を踏まえ、本研究では実際の使用における上海語変調域の全体像を明らかにするための調査を行う。

### 3. 調査手法

#### 3.1. 使用するデータ

本研究では中国で出版された上海語会話教材の音声を利用した。使用した教材は、丁迪蒙『学説上海話』(2004年)である。この教材は第1課から長めの会話で構成されており、教材音声は男性と女性の話者各1名がかなり早めの発話速度で読んでいる。教材音声を上海語母語話者1名(1991年生まれ)に聞かせて感想を聞いた所、「やや丁寧な上海語である」という回答を得た。本研究では、全26課のうち第1課から第10課までの教材音声を考察対象とする。

#### 3.2. 分析方法

調査者(筆者)は、第1課から第10課までの教材音声を聞きながら変調域を確定した。変調が適用された音節は単独音節時の基本声調とは明らかに異なるピッチを取るため変調域の確定作業は比較的容易であったが、「第一音節の基本声調がT1以外かつ第二音節の基本声調がT1に属する語で起きる変調(non-T1, T1)」は除外した。これは、変調域の第一音節に位置するT1と第二音節に位置するT1でピッチがほぼ同一になり変調域の確定ができないためである。確定作業の結果、152個の発話から1762個の変調域が得られた。これらの変調域を本研究の考察対象とする。

### 4. 結果

#### 4.1. 変調域の音節数分布

調査対象である1762個の変調域の音節数の分布を図1に示す。図1を見ると、最も頻度が高いのは2音節の変調域(779トークン)で全体の44.2%を占め、次に頻度が高いのは「1音節の変調域」(584トークン)で33.1%を占める。ここで「1音節の変調域」と呼んでいるのは「単独音節時の基本声調」がそのまま出現したケースであり、変調を起こさなかった語のことを意味する。つまり、研究対象の「変調域」の約三分の一は変調が適用されなかったということである。頻度順では3音節、4音節、5音節の変調域がそのあとに続き、6音節の変調は1トークンのみ観察された。

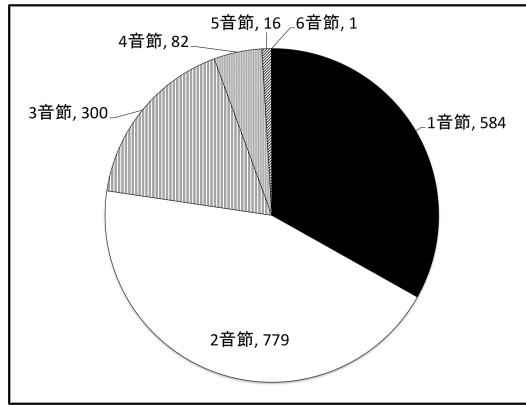


図 1. 変調域の音節数

#### 4.2. 3 音節以上の変調域と機能語（語気助詞、補語、代名詞）の関係

3 音節以上の変調域を詳細に観察すると、語気助詞や補語、代名詞などの「機能語」が末尾に含まれる例が多かった。ここでの「機能語」は意味的な側面に加えて「韻律面での自立性の弱さ」も定義に含んでいる。補語や語気助詞は単独で現れることがなく先行要素が必要となるため、上海語変調の「主要部」である初頭音節に現れることがない。また、単独音節からなる代名詞も文頭に現れる時を除けばほとんどの場合で先行要素の変調域に組み込まれる。図 2 では 3 音節以上の変調域における「機能語」の数とその分布を整理した。

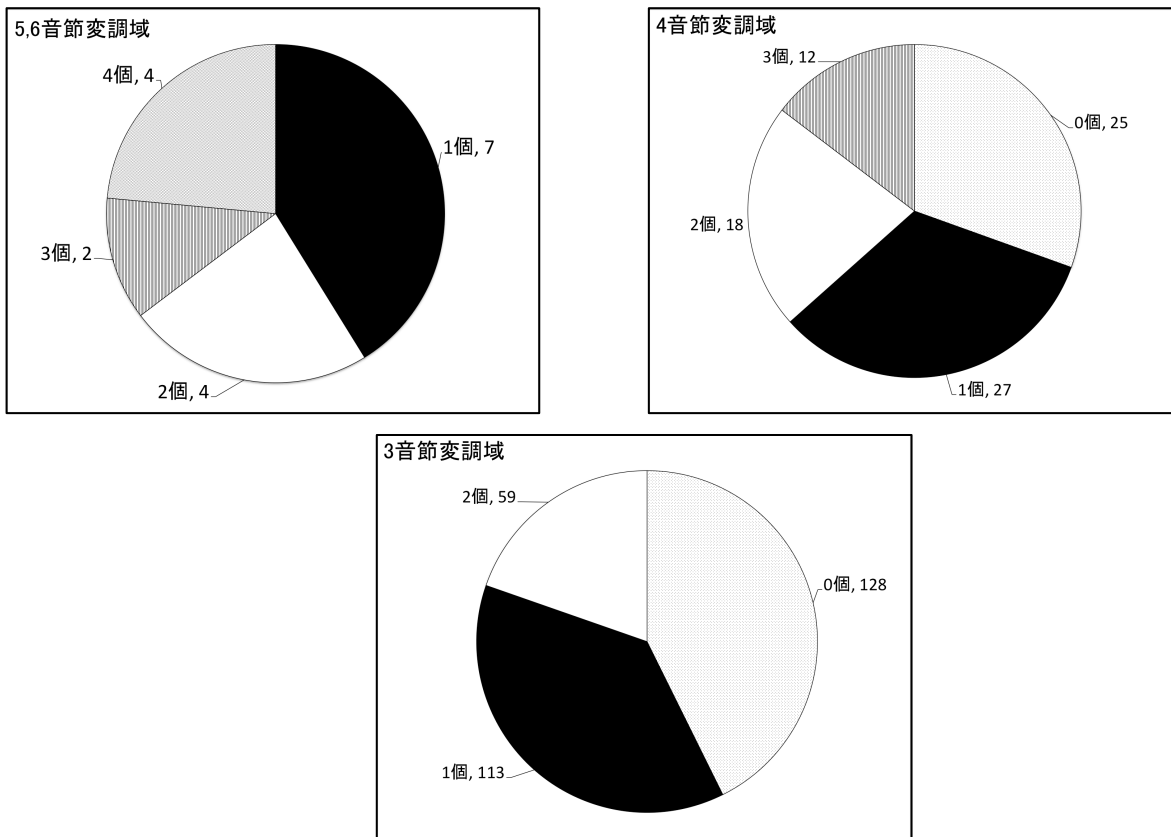


図 2. 「機能語」の数と分布（左上: 5, 6 音節変調域、右上: 4 音節変調域、下: 3 音節変調域）

5音節と6音節の変調域(図2左上)を見ると、全てのトークンで1つ以上の「機能語」が含まれることが見て取れる。また、4音節の変調域(図2右上)では69.5%、3音節の変調域(図2下)では57.3%のトークンが少なくとも1つの「機能語」を含む。「機能語」は韻律面での自立性が弱く先行要素の変調域に組み込まないとピッチが実現できないことを踏まえると、自立的な構成素のみで形成できる最大の変調域は4音節であると言える。図3では「機能語」を排除した変調域の音節数の分布を示す。「機能語」を除くと1音節と2音節の変調域で全体の8割以上を占め、3音節以上の変調域は全体の約10.8%しか存在しないことが図3から見て取れる。以上から、上海語で自立的に形成される変調域は2音節が圧倒的に多く、3音節以上の変調域を形成する際は「機能語による拡張」が起きている割合が高いと解釈できる。

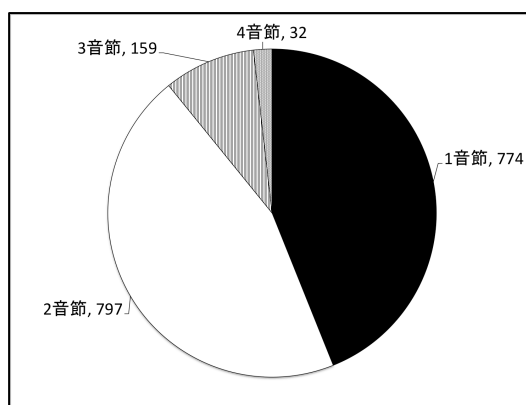


図3. 「機能語」を排除した変調域の音節数

#### 4.3. 変調域と統語構造の関係

変調域と統語構造の関係を詳細に観察した結果、変調域の形成は統語構造にかなり忠実に対応しており、(6)の境界内で変調域が形成される傾向が強かった。

(6) 変調域と統語構造の対応： **主語 | 副詞 | 動詞 補語 | 目的語 |**

統語構造の構成要素が内容語に限られる場合、(6)の境界(縦線)を越えて変調域を形成することはほとんどなく、構成要素が単音節の場合は1音節で変調域を形成する(つまり、変調を起さずそのまま基本声調で実現する)。(6)と先行研究の解釈を比較すると、Selkirk and Shen (1990)が提案した(3)の音韻語形成規則の問題点が見えてくる。(3)の音韻語形成規則に従うと、名詞・動詞・形容詞以外の語彙カテゴリーは変調域の始端となれず副詞は先行する要素(主語など)の変調域に組み込まれないといけな。しかし、本研究の調査結果では副詞はそれ自身で変調域を形成することが多く、先行・後続要素の変調域に組み込まれることは少なかった(ただし、後述7Bのような例外はある)。副詞と補語はともに動詞を修飾・補完する役割を持つが、動詞に先行する副詞はそれ自身で変調域を形成する一方、動詞に後続する補語は動詞の変調域に組み込まれるという対照的な特徴を持つ点

は、上海語（もしくは中国語）の動詞句の構造を反映していると言える（具体的には、[副詞 [動詞補語]<sub>VP</sub>]という構造になることが推測される）。

なお、(6)に従わず統語境界を越えて変調域を形成するパターンが少なくとも3種類観察された。

(7) 統語境界を超えて変調域が形成されるパターンと例

- A. 後部要素が代名詞・数量詞：汰汰伊「それを少し洗う」、买一件「一着買う」
- B. 高頻度の語：「否定の副詞「勿」＋述語」 勿欢喜「好きではない」、勿多「多くない」
- C. イディオム：上班「出勤する（動詞＋目的語）」、上课「授業に出る（動詞＋目的語）」

## 5. 議論と結論：上海語の変調域はどのような単位なのか

前節で見た調査結果は(8)のように要約できる。前節で述べたように上海語の変調域は2音節が最も典型的であり、3音節以上になる場合は「機能語」を後部に附属させて拡張させる傾向が強い。

(8) 調査結果の要約

- a. 変調域の音節数は2音節が最も多い（図1）。3音節以上の変調域には韻律的な自立性が弱い「機能語」が含まれる割合が高い（図2）。「機能語」を排除すると2音節変調域の占める割合はさらに多くなり、変調を起こすトークン（988トークン）の80.7%（797トークン）を占める（図3）。
- b. 変調域と統語構造は(6)のような対応関係を示す。ただし、(7)のようなケースでは統語構造を越えて変調域を形成する。

本研究の調査結果と矛盾が生じないのは Duanmu (1993, 1995)の解釈であり、「上海語の変調域はフットである」という主張には一定の妥当性があると筆者は考える。ただし、「統語構造との対応の遵守」が「2音節フットの形成」よりも優先されるため、単独音節のままで出現するケースが全体の3割を占めることは Duanmu の解釈からは予測できない点であり、理論的な分析においても韻律単位と統語構造の関係をより詳細に検討する必要があるだろう。

### <参考文献>

丁迪蒙. 2004. 『学説上海話』. 上海: 上海科学技術文献出版社. Duanmu, San. 1993. Rime length, stress, and association domains, *Journal of East Asian Linguistics* 2.1. 1-44. Duanmu, San. 1995. Metrical and tonal phonology of compounds in two Chinese dialects. *Language* 71.2: 225-259. 毛世楨. 1997. 「上海話連調組的語言学相關物」. 『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』第5期. 88-91. Selkirk, Elizabeth, and Tong Shen. 1990. Prosodic domains in Shanghai Chinese. In Sharon Inkelas and Draga Zec (eds.), *The Phonology-Syntax Connection*. Chicago: University of Chicago Press, pp. 313-338. 許宝華・湯珍珠ほか. 1988. 『上海市区方言志』. 上海: 上海教育出版社. Yip, Moira. 2002. *Tone*. Cambridge: Cambridge University Press.

謝辞：本研究はJSPS 科研費 15K16742 の助成を受けたものです。